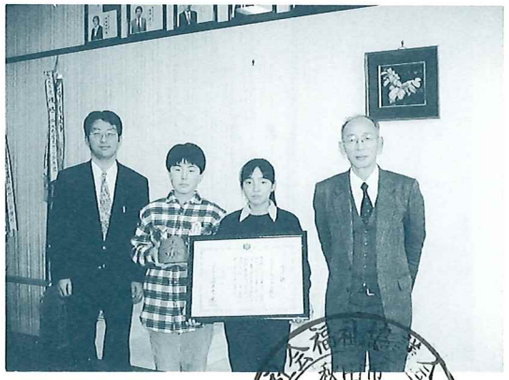
福祉浜田

第７号
平成10年２月１日
秋田市浜田地区
社会福祉協議会
秋田市新屋支所内
電話　0188－88－8080

平成九年度第34回全国花いっぱい
運動コンクール運輸大臣賞受賞



秋田市社会福祉協議会
10.2.-9
受付番号

思いやりの心で

浜田小学校六年　石黒佑美

わたしの家は、おじいさんとおばあさんがいっしょに住んでいません。でも、浜田や手形など、同じ市内に住んでいるので、すぐに会うことができます。わたしは、遊びに行くといつも優しく迎えてくれるおじいさんとおばあさんから思いやりの心や幸せをたくさんいただきました。

おじいさんやおばあさんからのプレゼントはあたたかい言葉です。バスケットの試合などで疲れているときの「がんばったね。」という言葉。夕方帰ろうとするときの「事故にあわないように気を付けてね。」という言葉。かぜをひいたりけがをしたりしたときの「具合だいじょうぶ?」という電話の言葉・・・。おじいさんとおばあさんの言葉にはわたしたちを思う優しい心があふれています。その一言のおかげで疲れがふきとんだり、ほっとしたりしてとても幸せな気持ちになります。思いやりの心を言葉で表すのが難しいこともあるけれど、おじいさんやおばあさんのように人の心をあたたかくできる言葉を自然に言えたらすてきだなと思います。

思いやりの心をもって行動する、それは、声に出して「思いやり、思いやり。」と言うものではなく、自分の行動で自然に表すものだと思います。ふだんの生活の中で、相手の身になって考えるということができれば、優しい心が自然にあふれてくるのではないでしょうか。

わたしは今まで、お父さんやお母さん、おじいさんやおばあさん、友達や先生、そして地域の方々など、たくさんの人たちからあたたかい思いやりの心を分けてもらって成長してきました。これから大きくなったら、今までお世話になった人たちに恩返しをしたいです。今までいただいた思いやりの心を、今度はわたしからみんなに、いっぱいあげたいと思っています。

発行責任者
会長　相原　繁

花いっぱい万歳

浜田小ＰＴＡ会長　相原久平

私たちの浜田小学校が、平成九年度・第三十四回全国花いっぱいコンクールで「運輸大臣賞」に輝いた。各都道府県の花だんコンクール・小学校の部で最優秀賞を受賞した、全国四十七校中、十本の指に入る快挙である。

「花づくりは、人づくり。」を教育理念とする、全くもって児玉校長先生の力によるところが大きく、ＰＴＡ会員一同、深く感謝の年に堪えない。

また、校長先生の、三十有余年に及ぶ、この花づくりの実践が、私たち浜田小学校で実を結んでくれたことを思うと、うれしく、校長先生と子供たちが出会った、何やら縁のようなものさえ感じられる。

最近では、校長先生の並々ならぬ熱意、意気込みが周囲に浸透し、花だん造成や花苗の植栽など、いろいろとお手伝いをしてくれる地域の方々が増えてきた。子供たちを育む、花づくりの輪が大きく広がってほしいものと思っている。

善意のおくりもの

平成九年二月～十年１月

香典返し
◆浜田字家後二一六－二
加藤喜美男さんから　三〇、〇〇〇円（亡父　喜一郎）
◆浜田字滝ノ下二〇二
石黒隆一さんから　一〇〇、〇〇〇円（亡父　久吉）
◆浜田字滝ノ下一三七
相原繁さんから　五〇、〇〇〇円（亡母　ミヨ）
◆新屋日吉町二番二号
藤田徳治さんから　五〇、〇〇〇円（亡父　末五郎）

篤志寄付
◆新屋表町一〇番三号
桜田ワカさんから　三〇〇、〇〇〇円（他二地区敬老会へ三〇万円）
◆西部公民館まつり実行委員会から　五、〇〇〇円
（チャリティバザー収益金一部）

心から感謝申し上げます

確かな舵とりを

浜田小学校長　児玉鈇八

少子化・高齢化社会は、予想を上回る速さで進行している。少子化現象は浜田小学校を例にとると明白である。平成元年度、児童数は二〇〇人で、六学年すべてが三〇人以上の学級編制であった。それが、平成一〇年度の児童数は一一七人で、最も児童数の多い学級は四年の二五人で、一、二、三年は二〇人を割る予定である。わずか一〇年間で八三人の減少は、あまりにも大きい。

一方、高齢化の進行はどうであろうか。厚生省の推計によると、介護を必要とする高齢者は、介護制度が始まる二〇〇〇年は二八〇万人だが、二〇二五年には五二〇万人に急増する。また、総務庁の発表によると、秋田県は、二〇〇五年に全国一の高齢県になることが確実視されている。たったの五年後のことである。

少子化・高齢化社会の進展により保険料負担の膨張が問題となっている厚生年金・国民年金制度について、厚生省は十二月五日、改革案を年金審議会に提示した。

現行制度のままでは、年金、医療の保険料、税負担などを加えた国民負担率は、二〇二五年度には五六%にまで激増する。毎年、一〇〇万人規模で新たな年金受給者が増えている一方で、年金制度を支える働き手世代は減少の一途をたどっている。年金財政が危機的状況にあるのである。

十二月九日、介護保険法が成立した。寝たきりや痴呆状態の高齢者らの介護サービスを行う介護保険制度が、二〇〇〇年四月から開始する。介護保険制度は、四十歳以上のすべての国民を加入者とし、保険料が月額平均二五〇〇円になるという。

年金制度や介護保険制度の必要性は、退職後や老後を考えると大変ありがたく、論を待つまでもない。問題は制度の運用面である。退職後、人並みの生活を送れるほどの年金を受給できるか、要介護認定はきちんと行われるのか、しっかりした介護サービスを受けられるのか、保険料や医療費は、無理なく年金から支払いできるのか、など。心配の種は多い。

政府は、住専に引き続き、銀行・証券会社の経営破綻処理にも公的資金（税金）を導入し、金融不安を解消するという。それで、国際金融市場で日本が信用を回復するならばやむを得ないだろう。

消費税・医療費等の値上げ、さらに、年金・介護保険料と国民負担はますます重くなる。国民の義務として負担すべきものは、苦しくてもがまんしなければならない。協力しようではないか。

願わくば、行政機関には、税金を大事に使ってもらいたいものである。不正支出や汚職、怠慢等は許されない。まちがっても彩グループのように福祉行政を食い物にする悪事はあってはならない。監査等のチェック機能を厳しくする必要がある。

今や日本は、金融、福祉、医療等、かつて経験したことのない急激な歴史的変化を迎えているのである。舵とりだけは、誤ってはならない。

毛利元就の老後の側室であった妙の言葉が忘れられない。

「よく生きた者だけが、よく死ねる。」

悲観材料の多い年末であるが、生きがいや働きがいを見い出し、一日一日を明るくたくましく生きようではないか。

（平成九年十二月二五日）

敬老会へ出演して下さった浜田小学校の皆さんです

"おとしより"になって

中村一区　渡辺　清

「これからこそ人生の青春、心の持ち方を大切に、そして感動の日々を…」。

これは還暦祝にご出席くださったある恩師の言葉である。高齢化社会の金言として以来、私の心の中にずっと生き続けている。あれから六年余り、六十路は半ばを超え『おとしよりの域』に達している。

まさに一光陰矢の如し一である。

戦後半世紀余りが過ぎ、国際化の進展と共に色々な交流活動が活発になった。また各種テーマをもって開催される〝シンポジウムやフォーラム〟なども一層盛んである。それは「国際交流の集い」や「世界の動きと日本・世界の秋田へ・地球市民としての二十一世紀への一歩・・・等々である。

私はこれらの活動へ「ほんとうの自分を知る真の出合い」を求め、できるだけ多く参加している。参加してみると自分の視野の狭さに驚くことも多いが充実した時間を過すことができた。共通点としては『間近に迫る二十一世紀は国際的交流化時代、個性と生き方が問われる。〝生きがい〟を求めその知恵を自分の体で感じ取ること。外に目と足を向け感性と感動を多く持つこと。それには多くの人々との心の交流こそ基本』ということでした。一方、私は六十才で仕事を離れた時から自分へ挑戦している事がある。その一つが、カルチャースクールの「実用英会話」。生涯学習としてどこまで持続できるのか不安もあった。でも若い頃英語が好きだったので「まずはやってみよう」と思いを馳せたのである。『国際交流に役立つ第一歩として外国の方々と、臨機応変に楽しく会話ができるようになれば、そこからコミュニケーションが生まれる』と。

英会話教室の開講は毎年春らん漫の四月。人それぞれに希望を胸に、その輝きは新鮮で真剣そのものである。そこには二十代から七十代の老若男女三十数人の顔と個性がある。

カナダや中国で生活体験した人、海外旅行やボランティア活動を楽しむ人、自然を親しむ人、茶道・華道や詩歌・俳句に魅せられ永く続けている人・・・などと、さまざま。和気あいあい今日を楽しもう、何かを覚えようと前向きである。

当初の私は予習を怠り、先生との会話を聴き取れず、何をどう話せばよいのか困ってしまう時があった。そんな時「みんなの優しい視線と応援」が助けてくれる。この時「ああ今日もみんなと一緒にやれた」と私の心を解放させる。習っている時は良く理解できるが忘れてしまう。とにかく〝習うより慣れよ〟という言葉を信じ、肝に銘じ実践している。

先生や、みんなに支えられ「今という時」を楽しく過せることが何よりである。

これからも人との心の触れ合いの中から「小さな満足や新鮮な感動」を求め、これを老後の心の支えとして、少しでも永く続けていきたいと思っている。できることなら〝より良いものを求めて今を力強く！〟を私のモットーにしたいものである。今後もますます高齢化が進み、極めて近い将来には「超高齢社会」が必至といわれている。いま改めて「人生わずか五十年」といわれた時代をかえりみる時、なんとも感慨無量。元気で生かされている今日に感謝の気持がこみあげてくる。

私の両親は、ある日突然脳溢血で倒れ、五日間ほど同じようにして床に就き、同じ年に他界した。父は六十九才、母は五十九才の春、と冬だった。四十数年前のことである。

いつ「無常の風」が吹いてくるかはわからない。それは、そのときはそのとき。心を豊かに、そして素直に『生き生きと老いること』ができれば有り難い。

まずは「今日を大切に」しなやかに生きようと思う。やがて老いゆく自分を、より素直に認めながらもー。

"おとしより"になって

中村一区　渡辺　清

「これからこそ人生の青春、心の持ち方を大切に、そして感動の日々を…」。

これは還暦祝にご出席くださったある恩師の言葉である。高齢化社会の金言として以来、私の心の中にずっと生き続けている。あれから六年余り、六十路は半ばを超え『おとしよりの域』に達している。

まさに一光陰矢の如し一である。

戦後半世紀余りが過ぎ、国際化の進展と共に色々な交流活動が活発になった。また各種テーマをもって開催される〝シンポジウムやフォーラム〟なども一層盛んである。それは「国際交流の集い」や「世界の動きと日本・世界の秋田へ・地球市民としての二十一世紀への一歩・・・等々である。

私はこれらの活動へ「ほんとうの自分を知る真の出合い」を求め、できるだけ多く参加している。参加してみると自分の視野の狭さに驚くことも多いが充実した時間を過すことができた。共通点としては『間近に迫る二十一世紀は国際的交流化時代、個性と生き方が問われる。〝生きがい〟を求めその知恵を自分の体で感じ取ること。外に目と足を向け感性と感動を多く持つこと。それには多くの人々との心の交流こそ基本』ということでした。一方、私は六十才で仕事を離れた時から自分へ挑戦している事がある。その一つが、カルチャースクールの「実用英会話」。生涯学習としてどこまで持続できるのか不安もあった。でも若い頃英語が好きだったので「まずはやってみよう」と思いを馳せたのである。『国際交流に役立つ第一歩として外国の方々と、臨機応変に楽しく会話ができるようになれば、そこからコミュニケーションが生まれる』と。

英会話教室の開講は毎年春らん漫の四月。人それぞれに希望を胸に、その輝きは新鮮で真剣そのものである。そこには二十代から七十代の老若男女三十数人の顔と個性がある。

カナダや中国で生活体験した人、海外旅行やボランティア活動を楽しむ人、自然を親しむ人、茶道・華道や詩歌・俳句に魅せられ永く続けている人・・・などと、さまざま。和気あいあい今日を楽しもう、何かを覚えようと前向きである。

当初の私は予習を怠り、先生との会話を聴き取れず、何をどう話せばよいのか困ってしまう時があった。そんな時「みんなの優しい視線と応援」が助けてくれる。この時「ああ今日もみんなと一緒にやれた」と私の心を解放させる。習っている時は良く理解できるが忘れてしまう。とにかく〝習うより慣れよ〟という言葉を信じ、肝に銘じ実践している。

先生や、みんなに支えられ「今という時」を楽しく過せることが何よりである。

これからも人との心の触れ合いの中から「小さな満足や新鮮な感動」を求め、これを老後の心の支えとして、少しでも永く続けていきたいと思っている。できることなら〝より良いものを求めて今を力強く！〟を私のモットーにしたいものである。今後もますます高齢化が進み、極めて近い将来には「超高齢社会」が必至といわれている。いま改めて「人生わずか五十年」といわれた時代をかえりみる時、なんとも感慨無量。元気で生かされている今日に感謝の気持がこみあげてくる。

私の両親は、ある日突然脳溢血で倒れ、五日間ほど同じようにして床に就き、同じ年に他界した。父は六十九才、母は五十九才の春、と冬だった。四十数年前のことである。

いつ「無常の風」が吹いてくるかはわからない。それは、そのときはそのとき。心を豊かに、そして素直に『生き生きと老いること』ができれば有り難い。

まずは「今日を大切に」しなやかに生きようと思う。やがて老いゆく自分を、より素直に認めながらもー。

浜田地区福祉の基本について

浜田振興会長　相場義信

全国的に高齢化社会を迎え、種々の機会にいろいろな形で福祉問題が話題になっております。このような時に浜田振興会を引受け、浜田地区全体の福祉問題にも取組む事になりました。人はだれでも幸せを願って生きています。若い人も、年をとってもそれは変わりません。若い人には若い人の野心がありそれなりの夢があります。気力も体力も充実した若い人たちは、幸せをつかもうとしてそれをやりとげるでしょう。ところが老人になりますと体力はもちろん、気力もおとろえています。しかし幸せな老後を送りたいという念願は立ち消えることはありません。

今若い人でも年々年寄るのです。これは自然の法則です。この法則には逆らうことはできません。人は年齢とともに健康についての不安や生活上の不安も増してきます。

特に一人暮らしの老人にとって、健康問題はことばでは言い尽くせないほど深刻な問題といえましょう。

福祉先進国といわれるある国では一人暮らし老人のお世話を二四時間体制でやっている。連絡をすると介護技術を身につけた人がすぐにかけつける仕組みになっている。医療機関の対応、治療にかかる費用なども心配しなくともいいようになっている。世界の経済大国と言われている日本の福祉行政のあり方を真剣に考えてもらわなければなりません。浜田地区は、息子や娘が独立し都会に出て生活しているケースが増えて来ています。そのため郷里には一人暮らしをしている父か母が多くおります。都会暮らしに慣れない老人には、やはり住みなれた浜田の人情や、先祖代々受け継がれてきた自分の土地や想い出のたくさん詰まった家など忘れがたく、古里で一人暮らしをしているのが実状です。人の幸せというものは人様々で、一つの物差では測りがたいもののようです。愛する息子や娘とともに都会でなれない生活をするよりも、郷里の山や川、朝夕ことばを交わす心の通う旧知、四季折々の風情、これらに幸せを感ずる人もまたいるのです。浜田地区は住みやすい環境のよい地域作りに努力し若い人達が他に生活を求めない、他から生活の場所として求められるような浜田にしなければなりません。福祉は国や県や市の行政が中心になって行う施設、医療、介護の専門的知識や技術をもった人の養成、予算措置を図るなどを推し、地区では同じ町内に住む者同士、一人ひとりがことばを交わし、励まし合い、助け合って生きていくことです。これが地域としての福祉の基本でないだろうか。地区の役員の方々も福祉問題には真剣に努力し行動している事を紹介し皆様からの協力と理解をよろしくお願い申し上げます。

敬老会で踊りを披露してくださった皆さんです

地域福祉に思う

民生児童委員総務　相原忠三

今年もよろしくお願いいたします。

早いもので、平成も十年目、昔流にいえば一昔のしめくくりの年にあたります。昨年は色々な事がありましたが、今年こそは明るいそして希望のもてる年であって欲しいものと願っております。

さて、私達地域福祉に些か拘っている者にとって関心の深かった介護保険法が昨年末にやっと本決まりとなりまして、新聞、特にテレビでその内容を詳しく説明されておりましたが、仲々問題点も多い様に感じられました。

益々高齢者が増えてゆく現実に、受ける側もそれを支える方も納得出来るような対応をすぐにしてゆくのは大変な事だと思うのですが、先づは実施してゆく中で色々手直しをしながら少しでも充実したものに近づけてゆくような良い方法がないものだろうかと思っています。何よりも大切なのは、若年者（支える側）と高齢者（受ける側）との連帯感、信頼感が要となって始めて介護法の意義が生きてくるのではないかと思っています。

私も年齢的には高齢者のうちに入る訳ですか、精神的には未だ未だ若いつもりでおります。福祉の真の目的は、本当に困っている人に力を貸してあげる事なのだと解釈しています。高齢者になればだまっていても何でもやって貰えるんだと云う甘えを捨てて、曲がりなりにも、自分で出来る事は自分でやると云う気構えを持ちたいものと思っています。それが、やがては、地域福祉を支えてくれている方々の高齢者への信頼にもつながってゆくものと確信しております。

最後に皆様の御健康と御多幸をお祈りいたします。

今の私

中村二区　石黒善雄

理解するなどとは、とてもできそうもない速さで変わっていく時の流れに、取り残される自分に、しょんぼりしたり、慌てたりすることを止めることにした。日替わり的な言葉や歌や風習、店頭に溢れる商品、氾濫する情報等。何と社会はせわしいことだろうか。これらを見事に取捨選択し、問われれば立て板に水の説明ができ、時代の流れの先々を見通し、てきぱきと動く切れ者といわれ、センスの良い着こなしと、上品な身のこなしをする人達を尊敬することも止めることにした。

私は、人が変わってきたようだ。還暦を迎える前後からじわじわと変わってきた。社会の変化の奥を覗こうとしたり、中学生の発する多くの情報を、できるだけキャッチし、理解したかのような立ちふるまいをしてきた自分が、今は信じられない思いがする。慌てなければいけない事柄や、尊敬しなければいけない人はもっと別にあったようだ。今は、地味で目立たない人達が、物陰でひっそりと咲かせている美しさを見逃さず、そういう美しさに感動する心を持った人になりたい。

私は十代の大人になる前の頃、高僧といわれた人達の、深い生き方に命をかける姿や、立身、出世とは無関係に汗して働く人達に憧れたものだ。できれば百姓か僧侶になりたいと思った時もあった。しかし、それは勇気がなく憧れで終わった。四十幾年もの長い間、そういう憧れを持っていたことすら忘れていたくらいである。

今は、還暦も過ぎ、定年退職し、ゆったりと時間の過ぎるに任せながらの毎日である。そういう中で、ちょっとし